名古屋女子大学　紀要　42（人・社）　249～254　1996

シェイクスピアの「リチャード二世」及び「リチャード三世」の王の眼に映じた神

齋藤　透*

God in the Eyes of the King in Shakespeare's *Richard II* and *Richard III*

Toru SAITO

I

先年「シェイクスピアと聖書」と題した筆者の紀要論文の中で、一番多く聖書が引用、言及されている劇作として、圧倒的に多いのが *Richard II* で、以下 *Hamlet, Henry VI Part 2, Henry IV Part 2* などが続き、英国史劇が上位に３つ含まれていることを述べ、英国史劇に比較的引用、言及の例が多いのは国王の台詞や国政に関しての台詞に宗教的な内容の表現が比較的多く入っているためと思われるが、このことは王権神授の思想などと考え合わせると興味深いことであるという趣旨のことを述べている。今回それらの史劇の中、内容的に関連のある二つの史劇、*Richard II* と *Richard III* を取り上げて、それぞれの劇中で王が神について触れている箇所を引用しながら、場合によってはその台詞の聖書との関連について考え、シェイクスピアが彼の史劇の中で、国王のキリスト教信仰のあり方を、彼らの内的な心情や策謀と照らし合わせてどのように推測し、また劇のプロットの上でどのように位置づけようとしていたかなどを考えてみたい。

先ずそれぞれの劇の中で王が神について述べた台詞を、日本語訳と併列して引用してみようと思う。[1]その際聖書と照合して特記すべきことがあればカッコ内に追記することとする。[2]

Richard II

1. Swear by the duty that you owe to **God**— / Our part therein we banish with yourselves— / To Keep the oath that we administer : (1. 3. 180 ～) [3]

「神に対する汝らの義務にかけて－余に対する義務は追放とともにさしゆるすが－ただいま言い渡すところを必ず守るよう、誓約せよ。」

2. You never shall, so help you truth and **God**, / Embrace each other's love in banishment, (1. 3. 183 ～)

「すなわち、真実と神の御加護あらんためには、両名、追放のうちに、友情を交わすことなかるべきこと。」

3. Now put it, **God**, in the physician's mind / To help him to his grave immediately ! (1. 4. 59 ～)

---

*名古屋女子大学非常勤講師

「神よ、何とぞ医師に力づけたまえ、即刻無事に墓場へ送りとどけますよう！」

4. Pray **God** we may make haste and come too late!(1. 4. 64～)
「神に祈って大急ぎだぞ、手おくれだといいが！」

5. **God** for his Richard hath in heavenly pay / A glorious angel. Then if angels fight, / Weak men must fall; for heaven still guards the right.(3 2. 60～)
「神は、この選びたもうたリチャードのために輝かしき天使一体をお傭いくださる。天使が戦いたもうとなれば、弱い人間は滅びねばならぬ。天は常に正義を守らせたもうのだから。」(旧約聖書詩篇34篇7節 "The angel of the Lord encampeth round about them that fear him, and delivereth them"「主の使いはその周りに陣を敷き主を畏れる人を守り助けてくださった。」(日本語訳は34篇8節)[4]新約聖書マタイによる福音書26章53節 "Thinkest thou that I cannot now pray to my Father, and he shall presently give me more than twelve legions of angels?"「わたしが父にお願いできないとでも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう。」以上旧約・新約の2カ所を参照して頂きたい。)[5]

6. If he serve **God** / We'll serve Him too, and he his fellow so.(3 2. 98 ～)
「彼も神に仕える身なら、余も神に仕える者。同輩たるにすぎまい。」

7. They break their faith to **God** as well as us. / Cry woe, destruction, ruin, and decay / The worst is death, and death will have his day.(3. 2 101～)
「が、余に叛けば、神への誓約を破るというもの。不幸、破壊、破滅、滅亡、何なりとかまいはせぬ。最悪は死だが、死はいつかは誰にも来るものだ。」

8. If we be not, show us the hand of **God** / That hath dismissed us from our stewardship, / For well we know no hand of blood and bone / Can grip the sacred hand of our sceptre(3. 3. 76 ～)
「もし余が王でないというならば、いつ神の御手が余を神の代理たる職から解かれたか、言え。ようわかっておるはず――人間の手ではこの、神聖な王の笏(セプター)を奪うことはできぬ。」(新約ルカ福音書16章3節以下参照、不正な家令の譬話。)

9. O **God**, O **God**, that e'er this tongue of mine, / That laid the sentence of dread punishment / On yon proud man, should take it off again / With words of sooth!(3 3. 133 ～)
「ああ、ああ！あの高慢な男に追放のきびしい宣告を言い渡したわたしのこの舌が、お世辞を言って、その宣告をまた取り消すとは！」

10. '**God** save King Henry,' unkinged Richard says, / 'And send him many years of sunshine days' (4. 1. 219 ～)
「『神よ、ハリー王を助けたまえ』と、王でなくなったリチャードは言う、『そして、王に多年の輝かしい日々を送らせたまえ！』と。」

以上が *Richard II* よりの引用である。次に *Richard III* から引用する。

Richard III

1. Which done, **God** take King Edward to his mercy, / And leave the world for me to bustle in.(1 1. 151 ～)
「神よ、そのあとで、エドワード王をなにとぞ召したまわんことを、あとの天下は、すべて私めにかき回させてくださいますように。」

2. Having **God**, her conscience, and these bars against me— / And I, no friends to back my suit at all; (1. 2. 239)
「神も彼女の良心を向うにまわして、おまけにこの醜男(ぶおとこ)で、おれの味方になってくれるものとしては、」
3. Whom **God** preserve better than you would wish! (1. 3. 59～)
「神よなにとぞ国王が、君たちが希う以上に長命であられますよう！」
4. I would to **God** my heart were flint, like Edward's, (1. 3. 140～)
「わたしの心がエドワードのように、火打石のようにかたくなだといい。」
5. And **God**, not we, hath plagu'd thy bloody deed. (1. 3. 181～)
「お前のむごたらしい行ないを罰したのは、われわれではなく神のなされたことなのだ。」
6. **God** pardon them that are the cause thereof. (1. 3. 315 ～)
「神よ！かくのごとき悪事の張本人を、なにとぞお赦しあらんことを！」
7. with a piece of Scripture, / Tell them that **God** bids us do good for evil: (1. 3. 334 ～)
「聖書をちよっとばかり引用して、神は、悪に対して善をもって報いよと命じたもう、と彼らに言う。」(「悪に対して善を報いる」という箇所に関して新約マタイ福音書5章43節及びテサロニケ前書5章15節などを参照。)
8. I thank my **God** for my humility. (2. 1. 73～)
「このような謙虚な心を私に賜った神に、私は心から感謝いたしております。」
9. **God** grant that some, less noble and less loyal, / Nearer in bloody thoughts, but not in blood, / Deserve not worse than wretched Clarence did, / And yet go current from suspicion. (2. 1. 92～)
「世の中には、あの哀れなクラレンスよりもっともっとひどい目にあうべき者が、大手を振って、立派に通用しているのに！彼よりももっと卑劣で不忠者で、血統は彼ほど王統でないが、考えはもっと悪党者がいるのに！」
10. **God** keep you from them, and from such false friends! (3. 1. 15)
「神がなにとぞあなたを、あのいつわりの人々からお護りくださいますように！」
11. earnest in the service of my **God**— / Deferr'd the visitation of my friends. (3. 7. 105 ～)
「神のお勤めに熱心になりすぎたあまりに、皆様のお出でを、おろそかにいたしました私めこそ、」
12. But, **God** be thank'd, there is no need of me—(3. 7. 164 ～)
「が、しかし、私ごとき者が出る必要がごうもないことは、神に感謝しております。」
13. Ay, I thank **God**, my father, and yourself. (4. 4. 156 ～)
「そのとおり，その点、神と父上と、それから母上に感謝している。」
14. Why then, by **God**—(4. 4. 378 ～)
「それなら、神にかけて……」

II

Part I で引用したように2人のリチャード王の劇中の発言だけで24箇所にわたって神に言及する台詞を指摘することができる。王以外の人物の発言を含めれば、神(**God** 又は**god**)が用いられた回数は二つの劇を合わせると100回を優に越えることになり、シェイクスピアの劇作品中では目立って回数が多い作品といえるだろう。もちろん他にも例えば *Coriolanus* の52回、

*Henry V*の47回など**God**（**god**）使用の回数の多い作品が見当らないわけではないが、この小論では2人のリチャード王の神に関しての台詞に的を絞って考えてみたいのである。

さて上述の引用、*Richard II*の10回、*Richard III*の14回の発言について検討してみると、この両王は共に王権の主張乃至執着には史実の上でも特に目立った君主であると言えようが、特にリチャード二世は、1376年の黒太子（The Black Prince）の没後の翌1377年わずか10才で王位を継承し、始めは黒太子の弟のランカスター公ジョン・オブ・ゴーント（John of Gaunt, the Duke of Lancaster）の指導する摂政評議会により補佐を受けていたが、1389年成年に達したことを宣言した後徐々に議会や貴族たちからの独立を志し、1396年先妻の死後フランス王シャルル七世の娘イサベルと再婚してフランスと和し、翌1397年には王は王権の絶対化（royal absolutism）[6]に至る完全な権威主義を確立しようと決心したらしく、もし彼の絶対主義への企てが成功を収めていれば、彼は今日彼と同時代のフランス及びイタリアの専制君主に比肩すべき絶対王制の創始者として記憶されているかもしれないというのが「英国の王と女王」（Britain's KINGS & QUEENS）の著者マイケル・セントジョン・パーカー（Michael St. John Parker）の意見である。しかしリチャード二世は1399年7月従兄弟のヘンリー・オブ・ボリングブルック（Henry of Bolingbroke）が追放先から帰国し、リチャードを捕え、代ってヘンリーⅣ世を宣し、リチャードが幽閉されたポンフレット城で翌1400年落命するに及んで、その王権絶対化への企ても水泡に帰した。

こうしたリチャード二世の志は、引用した彼の台詞の中**5**及び**8**に、王権は神によって授与されたものとみなす表現となって見えている。特に**8**の後半の台詞は、明らかに神の代理者として王に与えられた王座は人間がみだりに奪い得ないという確信に基いた発言であり、このあたりは後年ジェイムズ一世（James I〔1603－1625〕）が強弁した王権神授（divine right of kings）[7]の思想の前駆といってよいと思われる。**5**の“heaven still guards the right〔天は常に正義を守らせたもう〕”も独善的な王権の主張の裏付けに神を引合いに出すという虫の良さが観取される。

しかしまたリチャード王にせよ臣下にせよ、諸事をなすに当ってまず神を仰ぎ、その摂理に俟つ心ばえは13～14世紀当時の英国民全体の通念であったろうとも考えられる。試みに同じ*Richard II*の**God**への言及の中から臣下たちの台詞をいくつか選び出してみると、イサベル王妃に対する一臣下グリーンの言葉に

God save your majesty (2. 2. 41)〔神よ王妃陛下を守らせたまえ！〕があり、またボリングブルックが

In **God**'s name I'll ascend the regal throne (4. 1. 113)〔神の名において、王座にのぼりましょう。〕と言えば、カーライルの主教（Bishop of Carlisle）は

Marry, **God** forbid! (4. 1. 114)〔いけません！お待ちください。〕と慣用的な表現で始まる長い台詞の中で、神に仕える主教の身としては当然のことながら、属格の**God**'sを含めると5回にわたって神の名を口にしている。またヨーク公爵夫人（Duchess of York）は

Come, my old son, I pray God make thee new (5. 3. 145)〔おいで、せがれ。生れかわって新しい人間になるんですよ。（この部分は小田島雄志訳では「さ、おまえが生れ変わるよう祈りますよ。」となっている）〕のような一種の定型化された表現の中で**God**を用いている。

こうした神への信仰や信頼を表わす表現を、慣用的と言ってよいほど日常生活で多用していた時代であってみれば、王たるものがまず神〔絶対者〕に祈願し、その恩寵の信仰に生かされ

つつ王政を進めるのは当然のことであろう。ただ問題はつまずきやすい肉の器である人間の身でありながら、王権は神によって授与され、自らは神の代理者であるという過信から自己を絶対化して、王の行為は無謬であるかの如き思いに走ることは王座にあるものに許されることではなかろう。リチャード二世には史実としてこうした傾向があったが、*Richard Ⅱ* では彼の晩年の1398～1400年の出来事が劇化されているといわれるが、もはやそこではボリングブルックの圧倒的な体制化にあってリチャードは王位を退く他はない退潮の中にあって王権の主張も色あせて見える。

ここで一たんリチャード二世王から離れて、次に第２の *Richard Ⅲ* に目を転じてみよう。この劇からの王の台詞の引用のうち、気になるのは**1**（以後混乱を避けるために *Richard Ⅱ* よりの引用番号を**Ⅱ 1**，**Ⅱ 2**のように、また *Richard Ⅲ* よりの引用は**Ⅲ 1**，**Ⅲ 2**のように呼ぶこととする）の神に呼びかけて、自分に天下を牛耳らせてほしいという身勝手な祈願、そして**Ⅲ 4**の、自分の心を火打石のように硬化させるよう神に願う慣用表現（下線部）の

I would to **God** my heart were flint,（1. 3. 140）や、殊勝にも神への感謝を述べる**Ⅲ 8**，**Ⅲ12**，**Ⅲ13**のような表現の中での **God** の使用が目立っている。

リチャード三世はあからさまに王権神授の思想を唱えたりはしておらず、彼の王位獲得は権謀術数によるもので、この劇でも王になる以前のグロースター公（Duke of Gloucester）時代からの彼の手管の数々が披露されてゆく。しかし英国の代々の王たちの中でリチャード三世ほどに論争の種になった王はほとんどいないという。[8]人によっては彼を血に染んだ怪物だとし、また中傷で悲劇的に歪められた人物という見方もあり、ルネッサンス期の統治者の英国での見本だとみる人もあるようだ。またリチャード三世はボスワースの平原で戦闘中に戦死したが、英国王で戦場で死んだのは彼が最後である由で、シェイクスピアの創造したリチャードの有名な最後の文句は“A horse! a horse! My kingdom for a horse!〔馬を持って来い！馬を！馬を持って来た者には国をやるぞ！〕”であったなど話題に富む王である。

Ⅲ

以上のように２人のリチャード王についてシェイクスピア劇の中での台詞を調べたのであるが、どちらのリチャードもとに角神の名[9]を呼んで祈願していることはまちがいなく、また２人共に王位を守ろうとして懸命であったが、神はついに彼らにはほほえみかけることはなく、２人は共に非業の最後をとげている。彼らにとって神は真実にはどのような対象であったのであろう。

Ⅱ 7 の後半でリチャード二世は

“The worst is death, and death will have his day.”（3. 2. 103）と言って、万人に訪れる死を予告している。またリチャード三世はまだグロースター公だったとき、**Ⅲ 5**で、夫を殺されたマーガレットの悲嘆に対し、

“And **God**, not we, hath plagu'd thy bloody deed.”（1. 3. 181）と言って、マーガレットの怒りや悲しみの根源は自らの罪業にあり、それを神が罰したのだと、自らの恐ろしい犯行には口を拭ってうそぶいてみせるのである。して見ると両王共に、いつの日にか死が己れの上にも訪れて、神の前に申し開きをする時が待っていることは心ならずも予期していたのにちがいない。いや実はそれは劇作家シェイクスピアの心の思いでもあったであろう。

注

1）２つの史劇の原文は*Richard II*が“The New Penguin Shakespeare”（Penguin Books Ltd, 1981），*Richard III*が“The Arden Shakespeare ”（London Methuen, 1981）により、訳本は筑摩書房シェイクスピア全集から前者は菅泰男訳、後者は大山俊一訳を用いた。

2）カッコ内の追記についてはRichmond Noble, “Shakespeare's Biblical Knowledge”（New York Octagon Books, 1970）を参照した。

3）引用原文の箇所の示し方は算用数字で最初が幕，次が場、次が行を表す。例：1 3 180～＝第１幕、第３場、180行～。

4）聖書の日本語訳は日本聖書協会発行の新共同訳聖書の訳を用いた。

5）R Noble, *Ibid*, P.155 参照。

6）Michael St John Parker, “BRITAIN'S KINGS & QUEENS”（Hants Pitkin Pictorials）, P.15。

7）「万有百科大辞典」（東京：小学館，1978）P.102の記述によれば、「王権は神から授かったものであり、王は神に対してのみ責任を負い、また王に対してはいかなる制限も課すことはできず、人民の王に対する反抗は認められない、という政治理論。」とある。

8）M Parker, *Ibid*, P.18参照。

9）神の名は軽々しく口に出すべきではないというのも聖書の記述にある。特にユダヤ教徒は神の名をヘブル語で読む時は神（ヤァウェ）の呼称を避けて主（アドナイ）と呼ぶことになっている。